

音楽・図工・家庭・技術分科会 エデュスクラムの活用における成果と課題

	成果	課題
課題設定	<p>パートリーダーを中心に、どのくらいの時間を使って個人練習をするのかを決めたり、みんなで合わせてうまくいかないところは教え合ったりして、子供たちだけで練習を進めることができた。</p> <p>どんな合奏にしたいのかを、音楽との出会いの場面で子供たちがイメージすることができたので、実際に合奏して聴いて、自分たちの目指すべき合奏になっているか等の確認がしやすかった。</p>	<p>パートリーダーの力量により、パートのまとまりに差がみられた。全員がリーダーを経験できるよう、この題材を通してのキャプテンと、毎時間変わるパートリーダーを設定してもよかった。</p>
フリップやアイテム 完成の定義	<p>クラス全体で1枚のフリップを使うことで、お互いの進捗状況が可視化され、より自律的、協働的な活動を行うことができていた。</p> <p>アイテムは、ア・イ・ウで感じ取ったことと、パート毎に合わせて演奏することの2つとしたことで、表現の工夫と演奏の技能の両面に意識を向けて課題に取り組むことができた。</p> <p>アイテムを一目で確認できるようにしたことで、同じ進捗状況にある他のパートと合わせてみたいという思いが生まれる等、練習方法に工夫がみられた。</p>	<p>アイテムを動かしていくことだけに意識が向きがちであった。教師の促しがなくとも、演奏の工夫や工夫をするために必要な技能をどう身に付けていこうかと考えることができるように育てていく必要がある。</p>
ブック	<p>演奏をするうえで欠かせない楽譜こそが最強のブックであると考えて、楽譜をしっかりと見るように促したことにより、積極的に楽譜から情報をつかもうとする姿が見られた。</p>	<p>個別最適な学びのために準備した、範奏動画は有効な面もあるが、最強のブックである楽譜を見なくなってしまう側面もあった。動画は補助的役割であることをもっと意識させる必要があった。</p>
協働的な 関わりを 促す手だて	<p>最低限の演奏の質を保障するために、次に進むにはパート毎に教師のチェックを受け、合格をもらわないと先に進めないシステムにした。そのため、パートリーダーを中心に教え合ったり、互いの音を意識して演奏したりすることができるようになった。</p>	<p>音楽的な能力に差があるため、協働的な活動の中でも、教員の手が必要であった。どの児童も「自分たちでやりきった」という思いをもつための手立てが必要だと感じた。</p>
授業実践で 明らかに なったこと	<p>○最終的に「聴こえてくる音楽」は、エデュスクラムの実践の有無にかかわらず例年の演奏と比べて大きな差異はなかったように思う。ただ、児童の満足感や達成感、パート内やパートを超えた横のつながりは強かったように感じた。</p>	

